
論 文

泉鏡花の蔵書目録に関する考察

——中国古典文学受容研究の基礎的作業として——

于 達

1. はじめに

泉鏡花が生前に所蔵した書籍は、没後2年を経て、昭和16年8月に妻のすずから慶應義塾図書館へ寄贈された。しかし、昭和20年5月の空襲によって、蔵書の多くは焼失してしまった⁽¹⁾。鏡花の原稿や遺品は無事であったが、167部836冊に及ぶ鏡花の蔵書は、草双紙関係の48部のみを残して失われたのである⁽²⁾。

幸いに、焼失以前の旧蔵書は、慶應義塾図書館に収められた際に長谷川覺がその目録を書き留めておいた。その「泉鏡花蔵書目録」（以下は「蔵書目録」と略す）は岩波書店版『鏡花全集』第3巻「月報」第14号（1941・12）に載せられており、「支那の部」、「日本の部」、「外国の部」という3つの部分に分けて整理されている。そのうち、「日本の部」が一番多く、99部545冊、「支那の部」は60部338冊、「外国の部」はわずか3冊で、「全世界一大奇書」（原名「アラビヤナイト」）1冊と「レールモントフ集」2冊のみである⁽³⁾。さらに、長谷川は、鏡花自身が書き留めておいた草双紙の目録をもとに、鏡花が珍本として愛蔵していたものを調査し、「鏡花先生の『草双紙』目録」も作成した⁽⁴⁾。

鏡花文学と中国文学との関係について考察する際に、ひいては鏡花文学を理解するために、鏡花の漢籍蔵書やその読書遍歴を考察することは必要な手続きである。「珍本稀書こそないが、鏡花文庫をこくめいに漁ったら、その創作の何に由来するかを、案外知ることの出来るよすがとなるかも知れない」⁽⁵⁾。現存しないため、蔵書の形態、蔵書に見られる印記などについて確認のしようがないことは大変残念なことであるが、記載された書目を確認、整理すること自体、鏡花の読書趣向の所在を知る上でも意義深いことなので、本稿では長谷川の「蔵書目録」に基づき、その中における中国の文学作品を考察し、改めて整理することを目指す。まず「支那の部」における漢籍をジャンルごとにまとめ、漢籍でない作品を抽出する。それから「日本の部」について調査し、その中に混入されている漢籍と中国文学に関係する和書を抽出する。併せてそれらを調査するうちに気づいた「日本の部」における記載ミスな

どを提示する。最後に、以上の考察を踏まえ、泉鏡花蔵書における漢籍をジャンルごとに分類し、リストアップする。

1、「支那の部」に関する考察

「蔵書目録」のうち、「支那の部」は60部、338冊にも及んでいることは前述した。須田千里⁽⁶⁾は「支那の部」における漢籍を漢詩集と小説類に大別し、そして小説類としては雑俎類と志怪小説の類が多いと指摘している。実際に、「蔵書目録」には漢詩集と小説のみならず、『醉古堂劍掃』『七書』『釈氏要覧』などのような読書録、兵書、仏教書も含まれているので、2つに大別するのはやや難しいところがある。便宜上、「支那の部」における蔵書を「漢詩類」、「小説類」と「その他」に分けて考察することにする。

(1)、漢詩類

長谷川覺の「蔵書目録」は五十音順に並べられており、書名と版本と冊数だけが記載されている。「支那の部」の書名の下には全部「(木)」とあって、木版本であることが示されている。「蔵書目録」の「支那の部」における漢詩関係の書籍の書名、冊数、作者とジャンルを作者の生きた時代順で以下に並べる⁽⁷⁾。

①陶靖節集	2	(東晋)	陶淵明	詩集
②王昌齡詩集	1	(唐)	王昌齡	詩集
③王維詩集	3	(唐)	王維	詩集
④分類補註李太白詩	12	(唐)	李白	詩集
⑤岑參集	1	(唐)	岑參	詩集
⑥賈浪仙長江集	3	(唐)	賈島	詩集
⑦李長吉詩集	4	(唐)	李長吉	詩集
⑧李長吉集	2	(唐)	李長吉	詩集
⑨樊川詩集	4	(唐)	杜牧	詩集
⑩林和靖詩集	2	(北宋)	林逋	詩集
⑪山谷集	11	(北宋)	黃庭堅	詩集
⑫冷齋夜話	4	(北宋)	惠洪	筆記集・詩論書
⑬鶴林玉露	9	(南宋)	羅大經	筆記小説集・詩論書
⑭校本古文前集	1	(宋)	黃堅	詩文集
⑮校本古文後集	2	(宋)	黃堅	詩文集
⑯杜律註解	10	(明)	黃光升	詩集
⑰唐詩選	3	(明)	李攀竜	詩集
⑱杜律集解	4	(明)	邵傅	詩集

⑱芸苑卮言	4	(明)	王世貞	詩文評論集
⑳唐詩金粉	5	(清)	沈炳震	詩文集

以上に示されているように、漢詩関係の書籍は合計 20 部、87 冊で、『校本古文前集』『校本古文後集』『唐詩金粉』という 3 部の詩文集と『鶴林玉露』『芸苑卮言』『冷齋夜話』という 3 部の詩論書⁽⁸⁾のほかに、詩集が一番多く、14 部である。鏡花が好んだ李長吉、唐代の代表的詩人としてよく知られる「李杜」の他、「辺塞詩人」として有名な王昌齡と岑参も入っているのが目を惹く。

時代からいうと、明清時代に唐代の詩を集めて編集した『唐詩選』、杜甫の律詩を集めて解説を施した『杜律集解』『杜律註解』、詩文集の『唐詩金粉』も入れれば、唐代の詩集やそれに関する作品が一番多く、20 部の中の 12 部を占めているので、唐詩への傾倒ぶりが目立つ。それに次いで、宋代の詩集と詩論集が 6 部、後は東晋陶淵明の詩集と明代の詩論集『芸苑卮言』がそれぞれ 1 部ある。

(2)、小説類

「蔵書目録」の「支那の部」の中における小説、物語、伝記や説話を全部「小説類」として扱うと、合せて 34 部 231 冊ある。そのうち、特に志怪小説集や筆記小説集の比重が大きいのは以下のリストを見れば分かる。

①神異経	1	(前漢)	東方朔	志怪小説集
②劉向列女伝	8	(前漢)	劉向	女性伝記
③博物志	4	(西晋)	張華	志怪小説集
④搜神記	5	(東晋)	干宝	志怪小説集
⑤異記卷上	1	(南朝梁)	任昉	志怪小説集
⑥述異記	1	(南朝梁)	任昉	志怪小説集
⑦酉陽雜俎前集	6	(唐)	段成式	志怪・筆記小説集
⑧酉陽雜俎後集	4	(唐)	段成式	志怪・筆記小説集
⑨柳毅伝	1	(唐)	李朝威	伝奇小説
⑩法苑珠林	20	(唐)	道世	仏教類書
⑪釈氏要覧	3	(宋)	道誠	仏教類書
⑫夷堅志	20	(南宋)	洪邁	志怪小説集
⑬輟耕録	6	(元末)	陶宗儀	筆記小説集
⑭五雜俎	7	(明)	謝肇淛	筆記小説集
⑮謝肇淛塵余	2	(明)	謝肇淛	筆記小説集
⑯情史類略	12	(明)	馮夢龍撰	筆記小説集
⑰覓燈因話	1	(明)	邵景瞻	伝奇小説集

⑱新続列女伝	3	(明)	黄希周ほか	女性伝記
⑲列仙全伝	8	(明)	王世貞	仙道小説集
⑳琅邪代醉編	23	(明)	張鼎思編	筆記小説集
㉑姑妄聽之 (閔微草堂筆記)	2	(清)	紀昀	筆記小説集
㉒灤陽消暑録 (閔微草堂筆記)	2	(清)	紀昀	筆記小説集
㉓灤陽続録 (閔微草堂筆記)	2	(清)	紀昀	筆記小説集
㉔槐西雑誌 (閔微草堂筆記)	2	(清)	紀昀	筆記小説集
㉕如是我聞 (閔微草堂筆記)	2	(清)	紀昀	筆記小説集
㉖耳食録	4	(清)	樂鈞	筆記小説集
㉗虞初新志	10	(清)	張潮輯	短編小説集
㉘新齊諧 (子不語)	7	(清)	袁枚	筆記小説集
㉙唐代叢書	21	(清)	陳蓮塘	小説叢書
㉚夜譚隨録	12	(清)	閑齋	短編小説集
㉛聊齋志異	16	(清)	蒲松齡	短編小説集
㉜全図増評金玉縁	8	(清)	曹雪芹・蝶躑仙史評訂	長編小説
㉝▲孝感冥祥録	2	(享保)	伝阿説	仏書
㉞▲鷲談伝奇	5	(文化)	山東京山	読本

以上挙げた書目を四庫全書の「経史子集」の分類から見ると、史部伝記類の②⑱⑲、子部積家類の⑩⑪、子部雑家類の⑬⑳、集部の小説類の㉓、叢部の⑲の他、全部子部小説家類に属しており、しかもほとんどは「異聞之属」なので、そこから鏡花の読書趣向が見て取れる。前漢東方朔の『神異経』から清蒲松齡の『聊齋志異』に至るまで、中国各時代の代表的な志怪小説をほとんど網羅しているといっても過言ではない。

そのうち、特筆したいのは②『劉向列女伝』と⑱『新続列女伝』、並びに㉑～㉕の蔵書である。「列女伝」は前漢劉向が中国古代の女性の逸話、伝説などを記して頌を付したものであった。後世の人々の書いた劉向以降の婦人の伝記が後で加えられたので、宋の王回が劉向の手になるものを「古列女伝」(7巻)、後に加えられたものを「続列女伝」(1巻)とした。この2つの『列女伝』は合して一書となり後世に伝えられたのである⁽⁹⁾。劉向が編纂した『列女伝』は古くから日本に渡来し、江戸時代に入り、承応3年(1654)に李氏朝鮮刊の『新続列女伝』と合刻の訓点本が刊行されたという⁽¹⁰⁾。「国書データベース」(以降「国書DB」と記す)を調べると、承応2年から承応3年にかけて小嶋弥左衛門によって刊行された『新刻古列女伝』8巻と『新続列女伝』3巻、一帙11冊のものが見られるので、鏡花が所蔵した『劉向列女伝』と『新続列女伝』の形態と一致しているところから見ると、合刻した版本の可能性が大きかりう。

また、㉑～㉕の5つの作品は『閔微草堂筆記』に収録されている5種の著作である。紀昀が乾隆54年(1789)から『灤陽消暑録』『如是我聞』『槐西雑誌』『姑妄聽之』『灤陽続録』を次々

と発表し、そして、後にその門人の盛彦時が5種を合刊することを企画した。紀昀はそれを承認し、総題として「閔微草堂筆記」の名を与えた⁽¹¹⁾。日本では別々に刊行されたものではなく、大抵は『閔微草堂筆記』として流布しているのである。

検討の余地があるのは、▲を付けた『孝感冥祥録』と『鷲談伝奇』の2種である。

まずは『孝感冥祥録』(以下は『冥祥録』と略す)であるが、その書名で記録されている漢籍がないのに対し、「国書DB」を調べると、伝阿記・宝洲評『孝感冥祥録』という本がある。享保19年(1734)刊の2巻2冊であり、蔵書目録の記載冊数とも一致している。内村和至「宝洲槃譚の事跡について」⁽¹²⁾によれば、学僧宝洲が興仁寺在住時代に孝子善之丞の体験談を聞き、心を動かされたので、孝心ゆえに神仏の冥助を被り、地獄極楽を遍歴したという話を記録させ、『冥祥録』という本を成立させたのである。『冥祥録』の原写本は享保8年に成立し、その後は写本のまま流布し、同19年になって初めて刊行されることになったという⁽¹³⁾。

最後に挙げる『鷲談伝奇』も中国の文献ではなく、山東京山の『鷲談伝奇桃花流水』(「鷲談伝奇」と略される書名も見られる)という読本のはずである。本作は文化6年(1809)11月に出版された『小櫻姫風月奇観』に続いて、文化7年正月に出版されたもので、勧善懲悪を徹底した武家の敵討物語である。文化7年刊の『鷲談伝奇桃花流水』5冊の版本が実際にあるので、「蔵書目録」の記載とも合っている。長谷川覺「鏡花先生の『草双紙』目録」の中には山東京山の作品が5部も入っているため、『鷲談伝奇』というのは漢籍ではなく、山東京山が創作した読本と思われる。「日本の部」に入れるのが妥当である。

そうすると、鏡花蔵書における漢籍の「小説類」は全部で32部、224冊となる。『唐代叢書』には小説、志怪小説集、人物伝奇など幅広く収録されており、鏡花の所蔵した21冊がどの版本なのかは未詳である。それを除いて、仏教書が2部(『法苑珠林』『釈氏要覧])、女性伝記が2部(『劉向列女伝』『新統列女伝])、独立した小説が2部(『柳毅伝』『全図増評金玉縁])ある以外は、ほとんど志怪小説集や筆記小説集の類で占められている。

(3)、その他

「その他」の部では、漢詩と小説以外の作品について考察する。具体的な文献情報は以下の通りである。

①乾道本韓非子	5	(戦国時代)	韓非・片山格、朝川慶校読	著作集・文集
②大唐西域記	6	(唐)	玄奘訳・弁機撰	旅行記
③七書	4	(宋)	朱服校訂	兵書
④醉古堂剣掃	2	(明)	陸紹珩	清言小品集
⑤韓子識誤	2	(清)	顧廣圻	『韓非子』の校本
⑥▲広益玉篇	1	(明治)	原田由己	字書

ここには中国戦国時代の韓非の著作集の『韓非子』と顧廣圻の校本『韓子識誤』がそれぞれ

れ1部あるほかに、旅行記、兵書、清言小品集⁽¹⁴⁾と字書が各1部あり、合計20冊ある。①『乾道本韓非子』と⑤『韓子識誤』は各1部と記載されているのだが、弘化2年(1845)に出版された片山格、朝川慶校読の『韓非子』20巻5冊、『韓非子識誤』3巻2冊というのがあるので、鏡花が所蔵したのは弘化2年に出版された『韓子識誤』付きの『乾道本韓非子』の可能性が大きかろう。鏡花は『『新選怪談集』序』(1907・3)などに『韓非子』からの引用が見られるだけでなく、それに取材した作品(「かしこき女」)もあることから、本書を愛読したことがうかがえる。

②「大唐西域記」は12巻、唐の高僧玄奘がインド旅行中の見聞を語ったものを、弟子の弁機が筆録した書物であり、『西遊記』はそれに刺激されて書かれたものとされる。③「七書」とは「孫子」「呉子」「司馬法」「尉繚子」「三略」「六韜」「李衛公問對」の7種の兵書である。④『醉古堂劍掃』は明代末の陸紹珩が編集した清言小品集であり、書名の「醉古堂」は陸紹珩の雅号で、「劍掃」は劍をもって世の穢れを薙ぎ払うと共に自らの憂悶を一掃するという意が込められているとされる。

最後にある▲の付いている『広益玉篇』は「支那の部」にまとめられているが、実は「日本の部」に分類するべきであろう。中国には顧野王撰、唐の孫強増字、宋になると、陳彭年らが重修した『大広益会玉篇』という字書はあるが、『広益玉篇』というものはない。『広益玉篇』というものは明治20年に原田由己によって編集された小字典で、その例言では「依康熙字典為主玉篇刪復補遺遂成」と述べ、「玉篇」と命名するのは「姑從人人耳目之所熟也」と明示している⁽¹⁵⁾。中国の『玉篇』の縮本であるが、鏡花所蔵の『広益玉篇』は厳密に言えば、漢籍ではない。

2、「日本の部」に関する考察

「蔵書目録」の「日本の部」は99部、545冊の蔵書が記されている。筆者の調べた限りでは、99部の書籍は全部日本の書籍というわけではなく、中には漢籍も混入している。これからは「日本の部」に入っているのが妥当かどうか検討の余地がある書籍を取り上げてみよう。

(1)、「支那の部」に分類するべき作品

1、『客窗閑話』(4冊)と『続客窗閑話』(4冊)

『客窗閑話』は、清代の呉熾昌が『聊齋志異』に倣って書いた筆記小説集である。『客窗閑話』と『続客窗閑話』がそれぞれ8巻、道光己亥年(1839)、庚戌年(1850)に成立し、全部で130篇からなっている。日本にある『客窗閑話』の版本については、光緒元年(1875)未經堂蔵板正統16巻8冊と光緒2年(1876)学庫山房刻『客窗閑話』8巻4冊、光緒11年(1885)奎文堂蔵板が見られる。「泉鏡花蔵書目録」に記載されているのはどの版本なのかは確定できないが、漢籍なので、「日本の部」に収めるのは適切ではない。

2、『剣侠传』（1冊）

『剣侠传』と称される書物は、中国のと日本のと2種ある。

中国の『剣侠传』は、唐代からの剣侠小説が33篇収録されている短編小説集である。『唐代叢書』などの中では段成式著と記されているが、魯迅をはじめとする一連の考察では段成式作ではなく、明人の偽作であるとされる。明の王世貞によって編纂されたという説が一番有力であるが、まだ定説はない⁽¹⁶⁾。

鏡花が亡くなる前に刊行された『剣侠传』はほとんどが叢書、例えば、『晋唐小説暢観』（別名『龍威秘書』）、『秘書廿一種』、『剣侠传・続剣侠传・豪客伝・義妓伝』（別名『小説四種』）、『唐人説薈』（別名『唐代叢書』）などの中に収録されている形で、単独で刊行された版本は見られない。鏡花蔵書の中に『唐代叢書』（「支那の部」）と『秘書廿一種』（「日本の部」）があり、この1冊の『剣侠传』はどちらかに収められていた版本なのか、それともほかの版本なのかは確定できない。なお、鏡花が大正11年10月に発表した「十三娘」が『剣侠传』の中の1篇である「老人化猿」の翻案であることは作品の冒頭で明示されている。

日本の『剣侠传』は、大正2年兵事雑誌社出版、井本三郎編著の『剣侠传』であり、中には千葉長作の伝記や軍事、戦争に関することが書かれている。鏡花の蔵書は焼失してしまったので、考証しようがないのであるが、鏡花の読書傾向や蔵書の題材、加えて、その中の話を創作の材源として取り上げたことなどから判断しても、中国の『剣侠传』である可能性が圧倒的に高いと思われる。

3、『絵図今古奇観』（6冊）

『今古奇観』は、中国の明代末期に抱甕老人によって編纂された白話短編小説集であり、40巻、明末の崇禎年間（1628～1644）に刊行された。中国のいわゆる「三言二拍」から40編を選び集めたもので、ほとんど明代の話本⁽¹⁷⁾と考えられている。日本にも早く伝わり、多くの翻訳や翻案がある。浅井了意の『狗張子』、上田秋成の『雨月物語』、都賀庭鐘の『英草子』、曲亭馬琴の『松染情史』、同『高尾船字文』などは本書中の各編に題材を得ており、日本の近世文学に与えた影響は大きかったとされる⁽¹⁸⁾。

「全国漢籍DB」、「国書DB」、CiNii大学図書館にある書誌情報を調査したところでは、6冊の『絵図今古奇観』は石印本か排印本であり、木版本のものは見られない。

4、『五体千字文』（1冊）

「千字文」とは、同じ漢字を使わずに1,000字の韻文を作るという課題から出発して成立したものである。中国南朝梁の武帝が、周興嗣に文として意味の通る「千字文」を作らせ、これが今に伝えられることとなった。周興嗣作「千字文」は8文字の対句、計125句（合計1,000文字）から構成されており、書史的な意味で書家共通の書道手本となった。「千字文」の普及は唐の時代に入ってその勢いを増したようで、やがて日本に紹介されることになった。古代、とりわけ上代の書記文化にすでに大きな影響を及ぼしていただけではなく、その後漢

字や漢文の入門読本としても、書の手本としても使われ、日本で刊行された諸体千字文も数多い⁽¹⁹⁾。

鏡花蔵書に記載されている「五体千字文」は、史清晨の考察⁽²⁰⁾によると、貞享5年(1688)に丹波屋伝兵衛が開板した苗三径跋本、奥付なし岡西惟中序本、元禄5年に本屋勝助・藤田慶太郎・村上源兵衛が開板した苗村三径図讚本、文政1年に本屋山本平吉が開板した本の4種があり、いずれも冒頭に「明 明の孫丕蹟編輯」または「西甌孫丕蹟編輯潭陽王基校閲」と明記されているという。

日本人によって書かれた『五体千字文』も数多くある。例えば、安政5年(1858)山崎美成編『五体千字文』、明治13年高田忠周書『五体千字文』、大正3年高木和助編『五体千字文』などが見られる。鏡花が所蔵したのがどちらの版本なのかは分からないが、周興嗣の「千字文」をもとに編纂したものに違いないだろう。

5、『廿一種秘書』(18冊)

「日本の部」で記載されている書名は「廿一種秘書」であるが、清の汪士漢によって編纂された21部の作品集で、「秘書廿一種」というのが通称である。現在確認できる日本所在の『秘書廿一種』はほとんど中国で出版された版本で、16冊の版本、康熙8年(1669)題辭10冊、16冊、20冊、24冊の版本、乾隆7年(1742)序11冊、20冊の版本、嘉慶3年(1798)菁華書屋刊20冊の版本などが見られるが、「蔵書目録」で記載されている18冊のは見当たらない。一方、「蔵書目録」には、『秘書廿一種』所収作品のうち張華『博物志』(「支那の部」)、『劍侠传』(「日本の部」)の2書が独立した書として記載されている。これらが何らかの経緯で『秘書廿一種』から抽出されてしまったものであるならば、鏡花所蔵『廿一種秘書』18冊に加えて2冊、すなわち元々20冊本のいずれかであった可能性が考えられるが、決め手はない。保留とする。

以上、「日本の部」の中に入っているのは妥当ではないと思われる書籍について基礎的な考察をしたが、鏡花蔵書目録「日本の部」にまとめられている『客窗閑話』『続客窗閑話』『劍侠传』『絵図今古奇観』『五体千字文』『廿一種秘書』という6部34冊の書籍は「日本の部」ではなく、「支那の部」に分類するべきだと思われる⁽²¹⁾。

(2)、中国古典文学に関係する文献

次は「日本の部」における中国文学と直接関係のあるいくつかの作品について検討してみよう。

1、『夷堅志和解』(3冊)

「支那の部」に20冊の『夷堅志』もある。『夷堅志』には、明葉祖榮本(50巻)、明呂胤昌本(10巻)、明鐘惺増評本(50巻)、清耕煙草堂刊本(20巻)、清陸心源本(80巻)、民国張元濟輯本(206巻)、1981年何卓點校本(206巻28則)などがある。日本で見られるのは清耕煙草堂刊本20巻20冊のものと清陸心源本80巻14冊・12冊の版本である⁽²²⁾。「蔵書目録」の

「支那の部」の記載では『夷堅志』が20冊と記載されているので、清耕煙草堂刊本の可能性が大いにある。

『夷堅志和解』というのは近雅散人（斎賢）が『夷堅志』を抄訳した書籍であり、ラフカディオ・ハーンの旧蔵書にも収められている。貞享3年（1686）跋の本と、元禄3年（1690）に出版された8巻4冊の版本と元禄6年（1693）の8巻8冊の版本が見られる。播本眞一⁽²³⁾の考証によると、『夷堅志和解』で斎賢が抄訳のテキストとしたのは、前に挙げた明の鐘惺増評の『新訂増評夷堅志』である。

つまり、中国で刊行された清耕煙草堂刊本『夷堅志』と、明鐘惺増評本『夷堅志』をもとに抄訳された日本語版の『夷堅志和解』とが、ともに鏡花の手元にあったのである。2種の版本を持っていたところから見ても、鏡花の『夷堅志』愛読がうかがえよう。

2、『古詩韻範』（3冊）

武元登々庵の漢詩論を書いた名著で、押韻を中心とした古詩の作詩法を説明する本である。漱石蔵書にも文化9年（1812）の和本があったので、詩論書として明治時代の作家に人気があったのだろう。『古詩韻範』の版本については、文化9年河内屋茂兵衛蔵版のものが一番早く、文化8年（1811）山陽外史頼襄序、同年北林武元恒序、巻末に朱緑池賦が1篇付いている。他に、文化12年（1815）、天保2年（1831）、明治13年など様々な版本が見られる。ほとんどは5巻3冊のものなので、鏡花蔵書目録に見えるのが何年の版本なのかは分からない。

3、『莠句冊』（5冊）

正式名称は「古今奇談莠句冊」である。都賀庭鐘作、天明6年（1786）刊の9編からなる読本であり、寛延2年（1749）『英草紙』、明和3年（1766）『繁野話』に続く古今奇談シリーズの3作目として刊行された。3部ともに中国の白話小説を典拠とした短編小説集であり、『莠句冊』も『水滸伝』など中国の物語に日本の伝承を絡めて翻案した奇談が収録されているので、やはり中国文学と関連のある本と言えよう。

『莠句冊』は、中国の白話小説を日本の伝説の世界に翻案することを基本的な方法としており、その典拠も先行研究によって明らかにされてきた。例えば、『水滸伝』『聊齋志異』などに素材を求めていることはすでに指摘されている⁽²⁴⁾。

4、『新語園』（10冊）

浅井了意が書いた仮名草子であり、10巻、天和2年（1682）に刊行された。中国古典の中の教訓的な故事や逸話を選び、翻訳したものである。鏡花が明治40年に発表した「聞きたるまゝ」、明治45年の「唐模様」における「麗姫」などの10篇が『新語園』に拠っているのは、すでに須田千里（前掲 1991）に指摘されている。また、鏡花の『琵琶伝』における鸚鵡を通じて心を交わす構想も『新語園』における話に由来していることは拙論⁽²⁵⁾で

究明した。『新語園』は無論漢籍ではないが、その素材となる物語はすべて中国の故事であるので、鏡花文学と中国文学との関係を論じる際に、視野に入れるべきであろう。

5、『雨月物語』(3冊)

上田秋成によって書かれた読本で、5巻5冊あり、明和5年(1768)に成立し、安永5年(1776)に刊行された。中国の白話小説などを典拠としている。

泉鏡花の秋成好きは、彼の多くの談話や作品からうかがえる。特に秋成の『雨月物語』に対しては、「旧文学と怪談」という談話の中で、「私が第一だと感ずるのは上田秋成の『雨月物語』の中にある怪談で、例の『青頭巾』や『一つ目の神』乃至『片輪車』などを読むと、真の怪異に接する想ひで、雨風の夜などは自ら襟を合はせずには居られぬ」⁽²⁶⁾と述べ、高く評価している。

『雨月物語』は、体裁については、都賀庭鐘の『英草紙』『繁野話』に倣っており、また内容の上でも、中国白話小説の翻案であった上記2書に倣ったところが多い。各短編は『警世通言』など中国白話小説の怪奇的作品、また、『剪燈新話』など中国の故事や小説を典拠としていることはすでに多くの先行研究で明らかにされてきた。

6、『垣根草』(5冊)

都賀庭鐘が明和7年(1770)に書いた読本である。『垣根草』は江戸中期の読本で、5巻5冊、13話よりなる。中国の怪奇小説『才鬼記』『博異記』『剪燈新話』『剪燈余話』『今古奇観』などに材を取り、中世の日本を舞台に翻案されたもので、その中の話がほとんど中国文学を典拠としていることはすでに論証されている⁽²⁷⁾。

ほかに中国文学と関連している書籍は、江戸末期の漢詩人梁川星巖の『星巖集註』(8冊)、漢文読解に重要な虚字を扱った皆川淇園の『虚字解』(2冊)、『続虚字解』(2冊)、「神農」「張叔高」「勾踐」など中国の故事が多く取り入れられている『絵本故事談』(4冊)、そして、『桜姫全伝曙草紙』(6冊)、『宇治拾遺物語』(15冊)、『燕石雑誌』(12冊)、『怪談名香富貴玉』(5冊)、『凧草紙』(4冊)、『絵本梅花氷裂』(3冊)、『松浦佐用媛石魂録』(10冊)、『古今妖魅考』(2冊)などがある。

本稿の「日本の部」記載の作品に対する考証は、ごく基礎的なものに過ぎないので、不十分なところがあると思われる。近世文学が多く見られる「日本の部」には他にも中国文学から影響を受けたものがあるに違いない。しかし、以上の考察を通して、少なくとも「日本の部」に属しつつも、中国文学と無関係ではない作品が多く含まれていることが分かる。

(3)、記載間違いがある作品

鏡花蔵書目録「日本の部」には記載間違いのある作品があるので、以下に提示する。

1、『開元天保遺筆』(5冊)

「開元天保遺筆」という書名で調べられる書誌情報はないが、『開元天宝遺事』という中国の盛唐の栄華を伝える遺聞を集めた漢籍がある。五代の翰林学士などを歴任した王仁裕が編纂し、後唐の莊宗のとき、彼は秦州節度判官となり、長安にあって民間の故事を採集し、159条を得て本書にまとめたという。玄宗、楊貴妃の逸話をはじめ、盛唐時代への憧憬が生んだ風聞や説話が多く記されているので、鏡花の読書趣味にも合致している。本書は『顧氏文房小説』所収2巻本のほか、数種の叢書に収められ（鏡花の「蔵書目録」にある『唐代叢書』の中にも収められている）、寛永16年（1639）の和刻本もある。しかし、「全国漢籍DB」をはじめとした諸漢籍DBを検索したところでは、『開元天宝遺事』は5冊の版本が見当たらない。これは長谷川の記載ミスか、或いは活字化の際の校正漏れと思われる。蔵書目録における「開元天保遺筆」は、『開元天宝遺事』のはずで、「日本の部」ではなく、漢籍として扱うべきであろう。

2、『一夜叩喙』（1冊）

与謝蕪村に『此ほとり』という作品があり、別名「一夜四歌仙」「一夜四喙」ともされる。安永2年（1773）の版本では、題箋には「此ほとり 一夜四歌仙」、序首には「一夜四喙発端」と書かれ、巻頭に「四歌仙」と記されている。安永2年刊序文を見ると、序題の「一夜四喙発端」の「四」が「叩」と似たくずし字となっている⁽²⁸⁾。あるいは、長谷川が記載する際に、題箋ではなく序首に基づいて記録して、そして「叩」と見違えたのではなからうかと思われる。

従って、目録にあるのは「一夜叩喙」ではなく、与謝蕪村編の俳諧集である「一夜四喙」であったと考える。また、木刻本の『一夜四喙』はほとんど1冊のものなので、目録の記載とも一致している。

3、『出家茶話』（5冊）

「日本の部」にある『出家茶話』という本も、その書名では検索にかかる書誌情報が全く見当たらない。ところが、調べているうちに、『田家茶話』という本が目に入った。『田家茶話』というのは大藏永常が編纂した教訓集で、別名「奇説著聞集」である。「国書DB」によれば、江戸後期に成立し、調べられるものの中で一番早いのは文政3年（1820）刊の2冊のものである。

国立国会図書館サーチによる文政12年（1829）の資料の書名は「奇説著聞集」、刷り題箋の書名は「田家茶話」、「国書総目録補訂版」（岩波書店、1989～1990）によると、大藏永常作、蹄齋北馬画である。全部で5巻5冊、一帙入りである。冊数から見ると、鏡花蔵書目録の記載と一致している。また、天保12年（1841）丁子屋平兵衛出版の5巻5冊のものもあるので、鏡花所蔵のはどちらか確定できない。

4、『古今奇譚深山草巻四』（1冊）

角書きが「今古奇談」、目首の書名は「奇談深山草」で、「今古怪談深山草」という題名も

見られる。伊丹椿園作、福田安典校訂、天明2年(1782)刊の読本である。中に中国の志怪小説の書名が頻出し、中国の怪談話に拠ったところが多いので、中国文学に関係する日本文学と言えよう⁽²⁹⁾。

5、『怪談頃草子』(1冊)

「蔵書目録」では「怪談」の後は「頃」という漢字が書かれているが、「頃頃」(このごろ)が正しい。これは寛政6年源温故によって書かれた読本であり、もともとは「壺莖」(寛政6年版行になる)という書名であったが、後に「怪談頃草子」に、次いで「奇談情之二筋道」と改題されている。『壺莖』は『初期江戸読本怪談集』(国書刊行会、2000年)、『怪談頃草紙』は『近世怪奇談』(倉島節尚編 古典文庫55、1992)にそれぞれ翻刻されている⁽³⁰⁾。

長谷川が「泉鏡花蔵書目録」の冒頭に「匆々の際に書きとめておいたものであるから、いちいち内容を見る暇もなかった」と説明しているところからすると、以上をミスとするのも見当はずれとは言えまい。

(4)、資料のない作品

「日本の部」にまとめられた書籍のうち、『近世怪談集』(1冊)、『漂流巡島佐四郎物語』(1冊)の2部については、相当する資料が管見に入らなかった。これについては、それに相当する書籍が残されていない可能性もあるし、また、書名の誤記である可能性もあるので、さらなる考察が待たれる⁽³¹⁾。

3、鏡花の漢籍蔵書状況

以上の考察を踏まえ、「泉鏡花蔵書目録」の「支那の部」における日本の文学作品を除き、誤って「日本の部」にまとめられている漢籍を加え、改めて「泉鏡花蔵書目録」における漢籍の整理、分類を試みた。鏡花が所蔵した中国文学作品をジャンル別に「詩集と詩論書」、「小説類」と「その他」に分けて、それぞれ附表1、2、3にまとめた。なお、作品のうちに成立年が不明のものもあるので、著者や編者が生きた時代順に配列した。

附表1にまとめた詩集は14部62冊、詩文集3部8冊、詩論書は3部17冊である。『校本古文前集』『校本古文後集』『唐詩金粉』という3部の詩文集と『鶴林玉露』『芸苑卮言』『冷斎夜話』という3部の詩論書があるほかは、全部詩集である。時代から見ると、唐詩集やそれに関する詩論書が一番多く20部の中の12部を占めている。それに次いで、宋代の詩集と詩論書が6部である。

附表2をもって、鏡花蔵書目録における小説類をまとめた。長谷川覺の「泉鏡花蔵書目録」の「支那の部」に記載されている小説類のほかに、「日本の部」に混入した『剣侠传』『客窗閒話』『続客窗閒話』『秘書廿一種』『開元天宝遺事』という5部の作品も書き加えた。小説類が一

番多く、31部、181冊あり、唐代の伝奇小説『柳毅伝』と清代の長編小説『全図増評金玉縁』が独立した作品であるほかは、全部志怪小説集と筆記小説集であり、鏡花の読書好尚の所在が明らかである。叢書が2部、『唐代叢書』と『秘書廿一種』で、合わせて39冊であり、女性伝記が2部11冊、仙人伝記が1部8冊、仏教説話集が2部23冊ある。

漢詩、小説以外の書物を附表3の「その他」で統括した。「その他」の部には『乾道本韓非子』と清代の顧廣圻がそれを校閲した『韓子識誤』という思想書、『大唐西域記』、もともと「日本の部」に記載されていた『五体千字文』、兵法書の『七書』、明代の陸紹珩の『醉古堂劍掃』が含まれており、全部で6部、20冊である。長谷川覺の「蔵書目録」をもとに、鏡花が生前所蔵した文献を考察し、鏡花蔵書における中国文学を改めてジャンル別に整理したが、もともと60部、338冊であった漢籍は精査後、合計64部、369冊となった。具体的な部数と冊数は下表にまとめた。また、「日本の部」における中国文学に関係する和書と「日本の部」に対する増補と訂正は附表4と附表5にまとめた。

鏡花蔵書のうち、志怪小説集や筆記小説集といった怪談集の類が圧倒的に多いことがうかがえる。自分のことを「随分な迷信家」と称し、世の中に「観音力」と「鬼神力」⁽³²⁾という二つの大なる超自然力があると信じ込んでいた鏡花にはふさわしい読書趣味といっていよからう。

分類	具体的な分類	部数	冊数
詩集と詩論書	詩集	14	62
	詩文集	3	8
	詩論書	3	17
小説	小説集	31	181
	叢書	2	39
	女性伝記	2	11
	仙人伝記	1	8
	仏教説話集	2	23
その他		6	20
合計		64	369

(筆者作成)

おわりに

本稿では、鏡花の蔵書目録に基づき、中国古典文学に関連する蔵書について調査した上で、改めて分類し、整理した。鏡花蔵書全体から見ても、中国文学が相当な比重を占めていることが分かった。さらに、鏡花蔵書に対する整理を通して、鏡花の中国文学の読書好尚も明らかにした。周知の李長吉の詩に限らず、「李杜」、王昌齡、岑参といった辺塞詩人、宋の林和靖、

黄山谷の詩集に幅広く目を通していたこと、詩論書や詩文集も6部も持っていたことなどから、漢詩に多大な関心を持っていたことがうかがえる。また、どうしても目を惹くのは志怪小説集の類の蔵書である。漢の『神異経』から、晋の『搜神記』『唐代叢書』清の『閩微草堂筆記』『聊齋志異』に至るまで、各時代の代表的な怪異文学を広く渉獵していたのみならず、『謝肇淛塵余』のような稀覯本も見られる。「日本の部」における書物の中にも中国文学に関係する和書が多くあり、しかも、中国の怪談、奇談を収録したり翻案したりした作品が際立って多い。日夏耿之介（前掲）は鏡花のこの系統の読書趣味は、「談仙の理念の信に通じ、明治已降三代の間、鷗外に少く露伴に多くして、漱石藤村らに至つては全く無い東洋テラロジイ⁽³³⁾趣味の系譜といふもの」であると指摘、読書趣向における鏡花の独自性を主張したが、この読書趣味は鏡花の創作にも投影したと思われる。

鏡花の漢籍蔵書は「四庫分類」から見ると、子部小説家類異聞之属の書籍が一番多い。以上挙げた蔵書にある六朝志怪、唐代伝奇にしても、宋代筆記、清朝志怪小説にしても、「怪力乱神」の枠組みに属しており、正統的な中国古典とは対照的に扱われてきたものばかりである。鏡花蔵書にも見られる『子不語』（別名は『新齊諧』）の書名に示されているように、「子は怪力乱神を語らず」という言葉を逆説的に、敢えて怪異・勇力、悖乱、鬼神といった内容について語って見せるという目的から出発したのである。鏡花蔵書から中国文学の伝統、儒教倫理の束縛に対する反逆的な姿勢が見出される。鈴木啓子「正統と異端の転覆—鏡花における古典撰取の方法と精神—」⁽³⁴⁾は、鏡花の古典撰取の方法と精神は前近代の文芸を「古典」として祭り上げ、その正統性にあやかっ、自らの文学の権威付けを図ろうとする保守的姿勢ではなく、「むしろ異端の側、非権威の側に立つことで、正統と異端の枠組みを攪乱し、解体・更新しようとするラディカルな変革意識に満ちていたのではあるまいか」と主張しているが、それは鏡花の中国文学撰取の姿勢においても通底していると思われる。そして、日本文学、特に鏡花が幼少時代から親炙していた近世文学に中国文学の影響が大きかったことを考慮に入れば、それは一脈相承の関係にあるので、不思議もないだろう。

このように、鏡花の漢籍蔵書状況や読書趣向などを解明することは鏡花文学を理解する重要なアプローチになろう。鏡花はこちらの文学作品を繕くにとどまらず、創作にあたり、中国文学の材源を存分に生かし、大きな影響を受けたことは今後の課題として考察を続けたい。

【注】

- (1) 笹川臨風から贈られた『李長吉詩注』や『全世界一大奇書』が残されている。松村友視「慶應義塾図書館所蔵の鏡花遺品と自筆原稿について」『番町の家 慶應義塾図書館所蔵 泉鏡花遺品展』（2009・11 泉鏡花記念館）参考。
- (2) 檜谷昭彦ほか編「泉鏡花蔵書目録」『鏡花全集』月報29 1976・3。
- (3) 『鏡花全集』月報29に載っている檜谷昭彦ほか編「泉鏡花蔵書目録」では鏡花蔵書が167部836冊と書かれているが、長谷川覺の「泉鏡花蔵書目録」で記載されている書籍は161部、冊数は886冊であり、部数と冊数にずれがある。長谷川の整理した「蔵書目録」には具体的な書目書き記されているので、本稿ではそれを中心に考察することにする。

- (4) 『鏡花全集』巻16 月報19 1942・4。
- (5) 日夏耿之介「『高野聖』の比較文学的考察」『日夏耿之介全集』(5) 河出書房新社 1973。
- (6) 須田千里「泉鏡花と中国文学——その出典を中心に——」東郷克美編『泉鏡花 美と幻想』有精堂 1991。
- (7) 漢籍のジャンルについて、CNKI百科データベースを参考にした。本データベースに収録されている諸辞典では統一されていない場合は主として馬良春ほか主編の『中国文学大辞典』(天津人民出版社 1991)の項目を参考した。
- (8) 羅大経の『鶴林玉露』は筆記小説集に分類されているが、その中に詩や文人をめぐる逸話が多く含まれているので、詩論書として扱うことにした。
- (9) 林恵一「新統列女伝」『芸文研究』(10) 慶應義塾大学芸文学会 1960・6。
- (10) 小学館「日本大百科全書」(<https://kotobank.jp/word/%E5%88%97%E5%A5%B3%E4%BC%9D-151725>)による。
- (11) 内山知也『新釈漢文大系別巻 漢籍解題辞典』(明治書院 2013) 参考。
- (12) 内村和至「宝洲槃譚の事跡について」『芸文研究』(127) 明治大学文学部文芸研究会 2015・9。
- (13) 内村和至「宝洲と無能——『無能和尚行業記』をめぐって——」『芸文研究』(128) 明治大学文学部文芸研究会 2016・2。
- (14) 「清言小品」というのは明代末期から生まれた独特な文学形式である。「清言」は清い言論、議論を指す。内容は清雅と思われる文人の趣味、書画などを含む芸術の鑑賞や、無欲であり、清高と思われる老荘思想、仏教思想に基づいた人生に関する格言などがある。郭莉莉「清言小品『小窓幽記』解説——「霊」の部から——」(『千葉商大紀要』42(1) 2004・6) 参考。
- (15) 原田由己編『広益玉篇』盛化堂 1987(国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/863273>)。
- (16) 羅立群「『剣俠伝』的版本、作者及意義」『華南師範大学学报』2014・10。
- (17) 話本とは、中国の宋代から元のころまで行われた、口語体で書かれた語り物の台本のことである。
- (18) 内山知也『新釈漢文大系別巻 漢籍解題事典』明治書院 2013、丸井貴史「『三言』ならびに『今古奇観』の諸本と『英草紙』」『近世文藝』(97) 2013。
- (19) 相田満ほか「千字文の冒険——和漢比較文学研究における文字オントロジーの応用研究——」『研究報告人文科学とコンピュータ(CH)』2012(2)、史清晨「近世初期における千字文の受容と展開——和刻本諸体千字文を中心に」(大東文化大学博士論文 2022・3)。
- (20) 同注⁽¹⁹⁾。
- (21) 『五体千字文』は日本人によって書かれた書物の可能性もあるが、いずれにしても、周興嗣の「千字文」をもとに編纂したものと判断できるので、ここでは「支那の部」として扱うことにした。
- (22) 播本眞一「『夷堅志』と近世怪異小説」『国文学研究』(96) 1988・10。
- (23) 同注⁽²²⁾。
- (24) 及川茜「都賀庭鐘《四鳴蟬》試論——二つの言語の狭間で」(東京外国語大学 大学院教育改革支援プログラム「高度な言語運用能力に基づく地域研究者養成」(イタリア・ワークショップ) 2008・11、太刀川清「『莠句冊』の方法」『長野短期大学紀要』(31) 1981・12 などを参考。
- (25) 城西国際大学人文科学研究科2023年博士論文「泉鏡花研究——中国文学受容を中心に」第3章第1節。
- (26) 「旧文学と怪談」『鏡花全集』巻28 1909・12。
- (27) 劉菲菲「『垣根草』新論」『近世文藝』(103) 2016・10。
- (28) 国書DBに載っている北海道大学附属図書館所蔵安永二年刊『此ひとり 一夜四歌仙』の画像を参照、<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/10000068/manifest> (2023年9月20日閲覧)。
- (29) 太刀川清「椿園の小説(二) 中国小説の扱い方」『長野県短期大学紀要』(22) 1968・1。
- (30) 『壺菫』は寛政6年に出版され、寛政7年の後印があり、奥付部のみ改刻された。『怪談日頃草紙』は寛

政9年に上記後印の更なる改刻か。『奇談情之二筋道』は文政6年に改題されたものである。

- (31) 前掲注⁽⁵⁾では、日夏耿之介は鏡花蔵本の中に「深山草」や「近世怪談集」をはじめとした奇談物が多く、また「名香富貴玉」のような未見の本もあると述べているので、『近世怪談集』を知っていた可能性がある。しかし、現時点での資料では該当書は見つからない。
- (32) 「おばけずきのいはれ少々と処女作」(明治40・5)『鏡花全集』巻28。
- (33) テラトロジー、奇形学あるいは怪物学である。
- (34) 鈴木啓子「正統と異端の転覆——鏡花における古典撰取の方法と精神——」『文学・語学』(201) 2011・11。

- 【付記】 1、本稿は、2022年に城西国際大学大学院人文科学研究科に提出した博士論文「泉鏡花研究——中国文学受容を中心に」(甲第77号)の第1章第2節の内容に修正を行ったものである。なお、鏡花の蔵書調査にあたり、使用する諸検索データベースのご紹介から、『一夜叩喙』『田家茶話』『開元天宝遺事』の誤記のご提示に至るまで、博士論文の指導教員である城西国際大学人文科学研究科の岡田美也子教授から多大なご教示、ご協力をいただいたことに感謝を申し上げる。
- 2、本論文は、2023年度遼寧省社会科学规划基金一般項目「日本作家泉鏡花的中国古典文学翻案研究」(課題番号:L23BWW004)の研究の一部である。

(う) たつ 中国：遼寧省大連市大連外国語大学 講師 城西国際大学大学院人文科学研究科博士課程比較文化専攻 2023年度修了)

附表1「泉鏡花蔵書目録」における漢籍 詩集と詩論書

書名	冊数	作者	ジャンル 四庫分類
----	----	----	--------------

詩集

陶靖節集	2	(東晋) 陶淵明 (365-427)	詩集 集部 別集類 漢魏六朝之属
王昌齡詩集	1	(唐) 王昌齡 (698-757)	詩集 集部 別集類 唐五代之属
王維詩集	3	(唐) 王維 (701-761)	詩集 集部 別集類 唐五代之属
分類補註李太白詩	12	(唐) 李白撰 楊齊賢 集注 蕭士贇 補注 (701-762)	詩集 (註解付き) 集部 別集類 唐五代之属
岑參集	1	(唐) 岑參 (715-770)	詩集 集部 別集類 唐五代之属
賈浪仙長江集	3	(唐) 賈島 (779-843)	詩集 集部 別集類 唐五代之属
李長吉詩集	4	(唐) 李長吉 (790-816)	詩集 集部 別集類 唐五代之属
李長吉集	2	(唐) 李長吉 (790-816)	詩集 集部 別集類 唐五代之属
樊川詩集	4	(唐) 杜牧 (803-約852)	詩集 集部 別集類 唐五代之属
林和靖詩集	2	(北宋) 林逋 (967-1028)	詩集 集部 別集類 北宋之属
山谷集	11	(北宋) 黄庭堅 (1045-1105)	詩集 集部 別集類 北宋之属
杜律集解	4	(明) 邵傅 (未詳)	詩集 集部 別集類 唐五代之属
杜律註解	10	(明) 黄光升 (1506-1586)	詩集 集部 別集類 唐五代之属
唐詩選	3	(明) 李攀竜? (1514-1570)	詩集 集部 総集類 断 (各) 代之属

詩文集

校本古文前集	1	(宋) 黄堅 鈴木善教 校本 (宋末・元初?)	詩文集 集部総集類 通代
校本古文後集	2	(宋) 黄堅 鈴木善教 校本	詩文集 集部 総集類 通代
唐詩金粉	5	(清) 沈炳震 (1679-1737)	詩文集 集部 総集類 各代之属

詩論書

冷齋夜話	4	(宋) 惠洪 (1070-1128)	詩論書 子部 小説家類 雜記雜説之属
------	---	-----------------------	-----------------------

鶴林玉露	9	(南宋) 羅大經 (1196-1252)	詩文評論書、隨筆集 子部 雜家類 雜説之属
芸苑卮言	4	(明) 王世貞 (1526-1590)	詩論書 集部 詩文評類 詩話文話之属

附表2 「泉鏡花蔵書目録」における漢籍 小説類

書名	冊数	作者	ジャンル 四庫分類
小説と隨筆			
神異經	1	(前漢) 東方朔 (前154頃-前93頃)	志怪小説集 子部 小説家類 異聞之属
博物志	4	(西晋) 張華 (232-300)	志怪小説集 子部 小説家類 異聞之属
搜神記	5	(東晋) 干宝 (4世紀中ごろ)	志怪小説集 子部 小説家類 異聞之属
述異記卷上	1	(南朝梁) 任昉 (460-509)	志怪小説集 子部 小説家類 異聞 瑣語之属
述異記	1	(南朝梁) 任昉 (460-509)	志怪小説集 子部 小説家類 異聞 瑣語之属
柳毅伝	1	(唐) 李朝威 (766頃-820)	伝奇小説 子部 小説家類 異聞之属
酉陽雜俎前集	6	(唐) 段成式 (803-863)	筆記小説集 子部 小説家類 雜記雜説之属
酉陽雜俎後集	4	(唐) 段成式 (803-863)	筆記小説集 子部 小説家類 雜記雜説之属
開元天寶遺事	5	(唐) 王仁裕 (880-956)	筆記小説集 子部 小説家類 雜記雜説之属
夷堅志	20	(南宋) 洪邁 (1123-1202)	志怪小説集 子部 小説家類 異聞之属
輟畊録	6	(元末) 陶宗儀 (1329-約1412)	隨筆集 子部 雜家類 雜説之属
劍俠伝	1	(明) 王世貞? (1526-1590)	伝奇小説集 史部 伝記類 雜伝之属
五雜俎	7	(明) 謝肇淛 (1567-1624)	筆記小説集 子部 小説家類 諧諷之属
謝肇淛塵余	2	(明) 謝肇淛 (1567-1624)	怪異隨筆集 子部 小説家類 雜記雜説之属
覺燈因話	1	(明) 邵景瞻 (万曆年間 1573-1620)	筆記小説集 子部 小説家類 伝奇小説之属
琅邪代醉編	23	(明) 張鼎思編 (万曆年間 1573-1620)	隨筆集 子部 雜家類 雜纂之属
情史類略	12	(明) 馮夢龍撰 (1574-1646)	短編小説集 子部 小説家類 異聞之属 / 伝奇小説之属
繪図今古奇観	6	(明末) 抱甕老人 (崇禎年間 1628-1644)	短編小説集 集部 小説類 短編小説之属

聊齋志異	16	(清) 蒲松齡 (1640-1715)	短編小説集 子部 小説家類 異聞之属
虞初新志	10	(清) 張潮輯 (1650-1709)	短編小説集 子部 小説家類 異聞之属
姑妄聽之 (閱微草堂筆記)	2	(清) 紀昀 (1724-1805)	筆記小説集 子部 小説家類 異聞之属
灤陽消夏録 (閱微草堂筆記)	2	(清) 紀昀 (1724-1805)	筆記小説集 子部 小説家類 異聞之属
灤陽統録 (閱微草堂筆記)	2	(清) 紀昀 (1724-1805)	筆記小説集 子部 小説家類 異聞之属
槐西雜誌 (閱微草堂筆記)	2	(清) 紀昀 (1724-1805)	筆記小説集 子部 小説家類 異聞之属
如是我聞 (閱微草堂筆記)	2	(清) 紀昀 (1724-1805)	筆記小説集 子部 小説家類 異聞之属
全圖增評金玉縁	8	(清) 曹雪芹 (1715-1763頃) (清) 王希廉等評	長編小説 集部 小説類 章回小説之属
新齊諧 (子不語)	7	(清) 袁枚 (1716-1798)	筆記小説集 子部 小説家類 異聞之属
夜譚隨録	12	(清) 閑齋 (乾隆年間 1736-1795)	筆記小説集 子部 小説家類 異聞之属
耳食録	4	(清) 樂鈞 (1766-1816)	筆記小説集 子部 小説家類 異聞之属
客窗閒話	4	(清) 吳熾昌 (道光年間 1821-1850)	筆記小説集 子部 小説家類 雜記雜説之属
統客窗閒話	4	(清) 吳熾昌 (道光年間 1821-1850)	筆記小説集 子部 小説家類 雜記雜説之属

叢書

唐代叢書	21	(清) 陳蓮塘 (1711-1799)	唐代小説叢書 叢書部 雜叢類
秘書廿一種	18	(清) 汪士漢 (康熙年間 1662-1722)	叢書 叢書部 雜叢類

伝記類

劉向列女伝	8	(前漢) 劉向 (前 77 頃 - 前 6)	女性伝記 史部・伝記類 雜伝之属
新統列女伝	3	(明) 黄希周ほか (嘉靖年間 1522-1566)	女性伝記 史部 伝記類 雜伝之属
列仙全伝	8	(明) 王世貞輯 (1526-1590)	道教説話集 史部 伝記類 雜伝之属

仏教書

法苑珠林	20	(唐) 道世 (?-683)	仏教説話集 子部 釈家類
釈氏要覽	3	(宋) 道誠 (咸平景德年間 998-1007)	仏教解説書 子部 釈家類

附表3「泉鏡花蔵書目録」における漢籍 その他

書名	冊数	作者	ジャンル 四庫分類
乾道本韓非子	5	(戦国時代) 韓非 朝川鼎校閲 (前 280 頃 - 前 233)	思想書 子部 法家類
韓子識誤	2	(清) 顧廣圻 (1770 - 1839)	『韓非子』の校本 子部 法家類
五体千字文	1	(南梁) 周興嗣 (502 - 560) (明) 孫丕顯	書道手本書 經部 小学類 字書之属
大唐西域記	6	(唐) 玄奘奉詔訳 (唐) 弁機撰 唐貞観 20 年 (646) ?	旅行記 史部 地理類
七書	4	(宋) 朱服? 元豊年間 (1048 - ?)	兵法書 子部 兵家類
酔古堂劔掃	2	(明) 陸紹珩 明天啓 4 年 (1624) 頃成書	読書録 子部 雑家類 雑学之属

附表4「日本の部」における中国文学に関係する和書

書名	冊数	作者	ジャンル
夷堅志和解	3	近雅散人 (斎賢)	『夷堅志』の抄訳
古詩韻範	3	武元登々庵	古詩韻法書
莠句冊	5	都賀庭鐘	読本
新語園	10	浅井了意	仮名草子
雨月物語	3	上田秋成	読本
垣根草	5	都賀庭鐘	読本
絵本故事談	4	山本序周	絵画
桜姫全伝曙草紙	6	山東京伝	読本
宇治拾遺物語	15	未詳	説話集
燕石雑志	12	曲亭馬琴	随筆
怪談名香富貴玉	5	琴紫	読本
凧草紙	4	森羅子	読本
絵本梅花氷裂	3	山東京伝	読本
松浦佐用媛石魂録	10	曲亭馬琴	読本
古今妖魅考	2	平田篤胤	随筆
今古奇譚深山草卷の四	1	伊丹椿園	読本
星巖集註	8	梁川星巖	詩集

附表5「泉鏡花蔵書目録」の「日本の部」の増補と訂正

書名	冊数	作者	ジャンル
----	----	----	------

増 補

孝感冥祥録	2	伝阿説 宝洲評	仏教説話
鶯談伝奇	5	山東京山	読本
広益玉篇	1	原田由己	字書

訂 正

一夜四喰	1	与謝蕪村	俳諧集
田家茶話	5	大藏永常	教訓集
今古奇談深山草	1	伊丹椿園	読本
怪談田頃 草子	7	秋里籬島	地誌

更なる調査が必要な書籍

近世怪談集	1		資料なし
漂流巡島佐四郎物語	1		資料なし

**A Study of the Catalog of Books in the Izumi Kyoka's Collection:
A Fundamental Work of the Study of Chinese Classical Literature**

Yu Da

The books that Izumi Kyoka owned during his lifetime were donated to the Keio University Library in 1941. However, most of the books were burned during the air raid in 1945. Fortunately, Hasegawa Osamu wrote down a catalog of the collection when they were housed in the Keio University Library.

Based on the catalog of Kyoka's collection, this paper examines and reorganizes the works related to Chinese ancient books and Chinese literature in the collection. This paper will shed light on Kyoka's Chinese ancient book collection and his reading inclination. From that, it is found that Kyoka not only had a great interest in Chinese poetry, but also paid lots of attention to the supernatural fiction, such as records of the strange and diary novels, due to its large number in his collection. We can assume that after perusing these works, Kyoka made full use of these Chinese literary materials and was greatly influenced by them in his literary creation.